

追悼 高桑正敏先生

中峰 空

高桑先生に初めてお会いしたのは2000年9月16日、いわゆる「黒紋タダコブ」が得られる新潟県妙高高原町（現妙高市）の笹ヶ峰の林道でした。当日は記念すべき第1回コブヤハズサミットが当地で開催されており、私は神戸大の大学院生でDNA解析用のサンプルを採集中でした。この時はまだ高桑先生のことをよく知らなかったので、「うわー、この方があの高桑さんかぁ」と純朴に感激したことを憶えています。その後、2002年に菅平で開催された第3回コブヤハズサミットから参加させていただき、この頃からお話する機会が増えていきました。コブヤハズの凄い人、という印象はずっと変わらずに抱き続けましたが、お話しするたびに、愉快で面白い部分ばかりが増幅されていきました。

コブサミでは高桑先生は明け方まで飲みながら麻雀をされることが多く、朝食の時刻になっても起きてこないこともしばしばでした。それでもたたき起こされて（偉い方なのに！）、渋々朝食を召し上がっておられました。そういえば高桑先生は納豆が苦手で、「中峰くん、これあげるよー、いらないよー、食べてよー」と弱々しい口調で言われるのも毎度のことでした。宿での夕食も「中峰くん、これ食べなよ。ほら、若いんだから」と、高桑先生のお食事の

ほとんどを頂戴していたような気がします。

ここ数年は個人的な状況もあって、コブサミにも参加できず、コブヤハズカミキリからも少し距離を置き、カマキリの分類に注力するようになっていました。それでも、当の本人以上にコブヤハズカミキリの分子系統のデータを面白がってくださり、あまりに面白がってくれるので、ついうまく乗せられて、むし社から刊行予定の『図説 コブヤハズカミキリ』の分子系統に関する章を執筆することになりました。この原稿に関するメールをやりとりしたのが亡くなる4か月ほど前のことで、結局これが最後になりました。

もうちょっと子供が大きくなっている落ち着いたら、またコブサミに参加して、朝食の納豆を頂戴するのだと、そしてそれはこの先もずっと何年も続くのだと、勝手に思い込んでいました。

何の恩返しもできないまま、高桑先生は他界されてしまいました。コブサミで、ただただ面白くて笑っていたことばかり思い出します。本当に、ありがとうございました。そして心から、ご冥福をお祈りいたします。

（三田市有馬富士自然学習センター）

高桑正敏さんと学会大会

中林博之

今から40年くらい前のこと、地方在住の高校生だった私にとって東京は憧れの地であった。これはなにも大都市での暮らしに憧れていたわけではない。なにしろ東京には杉並区高円寺に月刊むし社（当時）、世田谷区経堂には昆虫文献専門店のT T S（東京通販サービス）がある。また、台東区上野では毎週木曜日にカミキリムシの愛好家が集まる、カミキリサロンなるものが開かれているという。さらに日本鞘翅目学会（当時）や甲虫談話会などもあり、カミキリ屋の卵の東京への思いは募るばかりであった。

そして大学進学により念願の上京を果たした私は、さっそく憧れの月刊むし社へ出入りするようになり（雑居ビルの一室にあり、かなり怪しい雰囲気であったが）、日本鞘翅目学会へも入会した。年に1度開かれる日本鞘翅目学会の定期大会は、私にとって大学とともに学問の世界に触れられる場であり、

大好きな虫の世界ということもあって楽しみのひとつであった。もっとも今から見れば当時の大会はカミキリサロンの延長という感じで、逆にこの雰囲気は初心者にとっては馴染みやすかった。しかしそんな中でも高桑さんはビシッとネクタイを締めたスリーピース姿。私にとって「高桑正敏」とは、月刊むし社と日本鞘翅目学会を興した偉大な人（当時）。実際の本人を目の前にした時の印象は今でも鮮明に残っている。

日本鞘翅目学会は1989年に甲虫談話会と合同し、会名を日本鞘翅学会に改めた。さらに2010年には（旧）日本甲虫学会と合併して現在に至っている。そんな歴史の中で高桑さんを筆頭とするコブヤハズカミキリ類の共同研究グループ（高桑さん、小林敏男さん、私の3人）は、日本鞘翅学会から日本甲虫学会へと姿を変える過渡期の大会で5回の口頭発表を行ってきた（2009年は中峰空さんを加

えて4人の連名)。

- 2004年第17回大会：八ヶ岳におけるコブヤハズカミキリ類2種の分布の動態
 2005年第18回大会：長野県奥裾花渓谷におけるコブヤハズカミキリ類2種の分布動態
 2006年第19回大会：コブヤハズカミキリ類2種の交雑地帯周辺における形質吸収の軌跡
 2007年第20回大会：白馬杓池高原におけるコブヤハズカミキリ類2種の分布動態
 2009年第22回大会：北アルプス高瀬渓谷におけるコブヤハズカミキリ類2種の分布

この一連の発表、仕掛け人が高桑さんであるのはい目瞭然だろう。高桑さんは1975年から5回にわたり月刊むし誌に「日本のコブヤハズカミキリ類の問題点」を連載し、全国的なコブヤハズカミキリブームに火を点けた。しかしその後、肝心の本人は「日本産カミキリムシ大図鑑」の発行を機にハナノミの世界へと行ってしまい、再びコブヤハズカミキリの世界へ復帰されるまでには15年近い歳月が流れていた。この間、次々に発見された分布接点とそこで採集されるハイブリット個体の存在は、高桑さんにとってまさに浦島太郎状態だったろう。当時、まだ発表していない分布接点を案内するたびに「よく知っているなあ、なんでこんな場所を知っているんだ！」と目を丸くされていた。こうして私たちの調査は長野県、山梨県といった分布接点のメッカである中部地方だけでなく、兵庫県など関西地方にまで及んでいった。そしてその成果は前述した大会での口頭発表や、さやばねニューシリーズへの投稿として結実した。

話は戻って2004年大会でのこと。口頭発表を終えた高桑さんは例の如く意気軒昂、曰く「これからは毎年、調査の成果を発表していく」、「今年は俺が発表したから、来年はお前(中林)の番だ!」と。もっともそのときは、いつもの酒飲み話だと思い軽く聞き流していたのだが……。

ところが翌年の8月22日、高桑さんからこんなメールが届いた。「今年の大会発表に申し込んでおきましたのでよろしく」、「テーマが奥裾花なので発表者は中林さん」、「高桑は今年の現地調査、ならび

に発表資料作成について協力させていただきます。がんばりましょう」。この件に関するエピソードは、すでに2008年に発行された「高桑正敏の解体虫書(華飲み会)」に書いている。詳しくはそちらを読んでいただくとして、かいつまんで述べると調査を行う前(結果が判明する前)の大会発表への申込み、調査当日は気温が高くて採集には適さず、おまけに私だけ1頭も採れなかったこと、一週間後に再度3人が集合したところ、全員仲良くツタウルシにかぶれていた事が判明するなど散々であった。

また、5回の発表のうち私が担当したのは2005年、2007年、2009年の計3回。こうして並べると順当に回を重ねてきたように見えるが、実は2008年には発表がなかった。だから本来なら2009年は高桑さんが発表する番である。しかし残念なことに準備当初、私はこのことを全く忘れていた。そして途中でこれに気がついて抗議したのだが、「ばれたか!!」しかし、気がつくのが遅かったね。あきらめてちょうだい」と、例によって軽く一蹴されたのは言うまでもない。

高桑さんは「みんなで楽しく」、「楽しいことはどんどんやろう」が口癖だった。だからいつもこのように、回りにいる誰かを巻き込んでいくのである。一方、巻き込まれた人は巻き込まれた人で、ブツブツ言いながらもみんなその状況を楽しんでいたと思う。これはお茶目でお洒落(ついでに駄洒落も)な、そして親分肌で面倒見の良い高桑さんだからこそ、と言えるだろう。なにしろ高桑さんと接したことのある人なら、誰もあの人がつこい笑顔と、相手の弱点を発見したときに見せる、何か言いたくてウズウズしている(意地悪な)笑顔を忘れることができないはずだ。

こうして高桑さんのことを思い出していると、いろいろなドタバタ騒動が走馬燈のように流れていく。残された私たちの喪失感は当面ぬぐえそうにないが、高桑さん、今まで本当にありがとうございました。いきなり寂しくなってしまったけど、小林さんと私の調査はまだまだ続きます。そしてこの結果報告は、私たちがそちらへ行ったときにさせていただきますね。

(熊本市)